

■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

子どものニーズに合わせた読書活動の実践報告

横浜市立中村特別支援学校

教諭 関戸優紀子

はじめに

本校は、昭和57年4月に中村養護学校として中村小学校と併設する形で開校しました。

本校の近くには、横浜市立大学附属病院や地域活動ホームがあります。本校に通う子どもたちの障害の状態は近年多様化しています。教育課程は自立活動の子どもがほとんどですが、知的代替、準ずる教育を行う子どもも在籍しています。興味・関心の幅を広げたい子どもの他に、言葉の習得を目指す子どもも近年増えてきました。中村小学校と併設されている本校にとって、学校間の交流は、大変重要な教育と考え、積極的に行っています。ドア1枚で学校がつながっているので、日常的に自由に学校間の行き来があります。小学生が昼休みに本校の子どもたちにリコーダーの演奏を聞かせてくれたり、本の読み聞かせをしてくれたりすることもあります。運動会や避難訓練などの行事も合同で行います。

また、教員間の交流も活発に行っています。交流によって、本校児童・生

徒が受ける影響はもちろんですが、中村小学校の児童に与える影響はより大きなものがあります。

〈活用事例〉

●高等部2年女子A



実態としては、小学部6年生から昼休みを中心に、iPadのアプリ「ボイスオブデイズ」を使用して「わいわい文庫」の本を読んできました。また、中学部1年生からは、コミュニケーション能力の育成をねらった学習の教材としても使用してきました。Aさんは「わいわい文庫」の本読みが大好きです。特に目次から教員が本を選び、自分の好きな本が始まると、最高の笑顔を見せたり、声を出して笑ったりします。

給食が終わると、早く本読みをしたくて、「ラララ～」と大きな声で周りの人に伝えられるようになりました。Aさんが「ラララ～」と言うと、近くにいる教員が期待感いっぱいのAさんの熱い視線を感じながらiPadを設置し「ボイスオブデイジー」を起動させます。最初のうちは、教員を目で追って訴えていましたが、「わいわい文庫」への興味・関心の高さを利用し、発声でコミュニケーションをとることができるようになったのです。

そんなAさんが中学部2年生のときに、今までの発声がなくなったり、やりとりができなくなったりしました。原因の一つとしては、「環境」が考えられました。中学部2年生のときは、毎日「わいわい文庫」の読書活動ができなかったことと、Aさんが手術を受け長期休みがあったことで、Aさんにとって楽しい昼休みの見通しがもてなくなったのだと考えました。

そこで、中学部3年生では担当の先生に協力をお願いして、基本的に毎日、読書環境が整うようにしました。4月から昼休みは毎日のように、iPadによる「わいわい文庫」の本読みを行いました。方法はさまざまですが、毎日取り組むことで、Aさんの発声でのやりとりが増えました。大きな声で誰とでも「ラララ～！」と言って本読みをしたい要求を伝えられるようになりました。

た。

また、「わいわい文庫」を使用した学習にも取り組みました。「視線で選択する」ということです。Aさんの好きな本の表紙の画面を写真カードにし、黒色のカードを並べ視線で好きなほうを選ぶという学習の教材にしました。「Aさん、読んでほしいほうを見て！」という教員の言葉がけで何度か取り組むと、Aさんは、黒色のカードを見ると何もなくて、自分が本の表紙の写ったカードを見ると、先生が「わいわい文庫」の再生ボタンを押し、本読みができるということを理解しました。そして、複数の本の表紙のカードから、いま自分が読みたい本を選ぶことができるようになりました。

昨年の春から、Aさんは高等部へ進学しました。本校は先に述べたように中村小学校と併設されているのですが、Aさんの教室は中村小学校1階にあります。教室環境だけでなく、授業内容や人的環境もがらりと変わり、Aさんはまた「わいわい文庫を読みたい！」という要求を教員に伝えるための発声がなくなりました。担任の先生から相談を受け、まずは、なぜ発声が出なくなったかを整理しました。その中で、昼休みの時間は今までより教室がざわざわしていること、誰に伝えて良いかがわからない、発声がないため、「わいわい文庫」を読まずに昼休みが終わる

ことが続いているということがわかりました。

そこで、発声がなくても毎日昼休みになったら「わいわい文庫」で本読みをしてもらうことにしました。毎日取り組むことで、1週間もしないうちに給食が終わり、マットに降りる際に期待感をもつような表情をするようになりました。見通しをもてたことが確認できたので、次は発声を促すために、本人にはイヤホンで聞いてもらい、どのような発声でも良いので、終わったことを発声で伝えられたら、教員が近くに行き、本人と次は何を読むかを決めてもらうように取り組みを始めました。毎日取り組むことで、小さな声ではありますが、「あ〜」という発声が出るようになりました。

その積み重ねがあって、高等部2年生になった今年度は、春の時点から自分の要求を大きな発声で、どの教員に対しても伝えることができ、やりとりをすることができました。

担任が変わる中で同じ絵本を教材にし、学習内容を変えて展開していることもあります。中学部1年生のときに、『べったんサンドイッチ』を「わいわい文庫」で提示しました。

初めは今まで読んでいた絵本よりも長いため、途中で他の絵本と変えてほしいというような発声が出ましたが、数日間毎日「先生のおすすめの本だか

ら読んで見てね」と伝えて見せることで、最後まで嫌がらずに見て聞くようになり、ついには絵本の中に繰り返し出てくる「はさむよ〜」のフレーズに声を出して笑うようになりました。

そこからAさんの好きな絵本の一つに加えられました。毎日のように読んでいたので、ページの切り替わりもわかっているようでした。中学部3年生で紙媒体のこの絵本を教員が読み、Aさんがページめくりをするという活動をしました。

そのページの終わり頃になると、Aさんは自分から手を動かし始め、絵本のページをめくるようになりました。「わいわい文庫」は紙媒体の絵本と同じようにページ送りがされるためこのような学習につながられました。この点も利点だと考えます。

そして、今年度は、日頃の学習成果を披露する行事の舞台発表で、この『べったんサンドイッチ』を友達と一緒に実際に再現する発表を行うことになりました。教員と舞台発表の練習を重ねる中で、教員がついて読むことができない待ち時間や昼休みに、「わいわい文庫」で『べったんサンドイッチ』を何度も読むことができ、Aさんのやる気の維持にもつながりました。

高等部2年生になり、いよいよ卒業後に向けて進路体験実習の回数も増えています。進路先では自分の想いを伝

えて、相手とやり取りできることはもちろん大切なことですが、一人で過ごせることも身につけておかなければいけないスキルになります。

Aさんは、上手にはなってきましたが、思うように手を動かして器用にiPadを操作することはむずかしいです。マルチメディアDAISY図書の利点である本のページ送りが自動で行われることで、Aさんは一人で本を読んで楽しく過ごすことができます。Aさんにはいろいろな絵本のお気に入りがありますが、「わいわい文庫」で読書を始めた頃からずっと『パパンがパン』と『ことことことこと』が特に好きで、この本を読んでいるときは教室にAさんの大きな笑い声が響き、私たち教員も幸せな気持ちになります。この先も一人で楽しめる活動として使用できたらうれしいです。

●高等部2年女子B



本生徒は教員が話しかけると話している教員を見たり、やりとりで笑顔を見せたりします。かわいいものや、食べることが好きで、特にスイーツが大好きです。操作や興味・関心の幅を広げるために、iPadを使用した学習をしています。

本校では、数年前より子どもたちの読書活動推進の取り組みの一つとして、図書と給食のコラボレーションを行っています。年間4作の絵本を題材にした給食が出ます。その中の『ぐりとぐら』のカステラでは、コラボ給食が提供される前から楽しみにするために、昼休みにiPadの「ボイスオブデイズ」で『ぐりとぐら』を読みました。

また、授業として、学校司書と司書教諭が中心となって、絵本の世界の疑似体験をしました。給食で出た甘いカステラをBさんはとてもおいしそうにぺろりと食べました。ふだんBさんは、絵本の読み聞かせにはあまり興味を示さないことがまだ多いのですが、カステラを食べた後にわいわい文庫の『ぐりとぐら』を読むと、しっかりとした目で画面を見つめることができました。そんなBさんの姿を見て、絵本の世界と実体験がつながった瞬間だと思いました。

おわりに

肢体に不自由があり、重度重複の子

どもたちが多く通う本校では、教員との1対1のかかわりを待つ時間も多く出てしまうことがあります。そんなときに、学習として、また娯楽の時間として子どもたちの側にマルチメディアDAISY図書があることはとても有効なことです。

本校では、各クラスに1台iPadがあり、子どもたちは学習に使用しています。また、高等部からは自分のiPadを学校に持ってきて学習に使用している生徒が多くおり、子どもたちにとって身近なものになっています。

もちろん読み手と聞き手のやりとりのライブ感は、紙媒体の本のほうがあると感じます。本をめくる行動や、本の紙

の匂いなどがわくわく感を高めます。

しかし今回の活用事例にもあったように、一人で読むことや操作することが困難な子どもたちが、自分たちのタイミングで本読みができることは、とても素晴らしいことだと思います。読書を通して、想像力や実体験につなげていくことができるので、子どもたちの学習に必要なものだと考えます。

日常の中で当たり前のように、自分の好きな時間に読書をするのができたら素晴らしいと思います。今後、さらに使用者や使用場面を増やす中で、たくさん子どもたちに、気軽に読書活動の習慣を身につけてほしいと願っています。

